

水産衛生対策（海面）

山根弘士（増養殖部）

1 目的

養殖魚介類の防疫指導を適切に行うことで、疾病のまん延防止を図り、安全・安心な水産物の生産・供給体制を確立する。

2 方法

1) 養殖場の巡回指導

県内養殖場を中部（田辺湾）、南部（串本浅海漁場・大島漁場）、東部（浦神湾）の3海域に分け、毎月1回ずつの巡回指導を実施した。

2) 水産用医薬品残留検査

マダイ養殖における水産用医薬品適正使用指導に資するため、平成25年10月17日に串本大島漁場（2歳魚、平均魚体重1.6kg）、21日に田辺湾（1歳魚、平均魚体重0.8kg）から5尾をサンプリングし、筋肉中の塩酸オキシテトラサイクリンの医薬品残留検査を実施した。

3) 魚病検査

巡回指導の際のサンプリングや試験場に持ち込みのあった検査検体に対して魚病診断・健康診断を実施し、原因確認とそれに対する対策指導を行った。診断は、外部症状や解剖による内臓の病変を観察した後、常法に従って寄生虫、細菌の検査を行った。細菌は抗血清による簡易同定を行った。また、イリドウイルス病はギムザ染色またはPCR法、キセノハリオチス症およびヒラメのクドア（クドアセプトンブクター）症はPCR法、ウイルス性神経壊死症（VNN）およびウイルス性出血性敗血症（VHS）はRT-PCR法により検査を行った。

3 結果及び考察

1) 養殖場の巡回指導

養殖業者に対しては、魚病発生状況ならびに水産用医薬品の使用についての状況調査、指導を行った。

2) 水産用医薬品残留検査

両海域の養殖マダイからは、塩酸オキシテトラサイクリンは検出されなかった。

3) 魚病検査

(1) 魚病診断（資料1）

診断件数は13魚種101件であった。魚種別では、マダイが35件で最も多く、次いでクロマグロの30件、トラフグの14件であった。これら3魚種で約78%を占めていた。月別に見ると高水温期の8～10月に多かった。

(2) 魚種別魚病診断状況

カンパチでは、7月に原因不明のへい死が見られた。寄生虫性疾病では、ゼウクサプタ症が住血吸虫症との合併症で4月と2月に、ネオベネデニア症及び住血吸虫症との合併症で11月に発生した。

マダイでは、イリドウイルス病が単独およびエドワジェラ症、エピテリオシスチス病、レンサ球菌症、海産白点病等との合併症で8～12月に合計10件発生した。細菌性疾病はウイルス病や寄生虫性疾病との合併症として確認されたものも合わせると合計24件見られ、エドワジェラ症、エピテリオシスチス病、腹部膨満症、滑走細菌症、レンサ球菌症であった。寄生虫としては、ビバギナ、ラメロディスカス、トリコジナ、海産白点虫の寄生が見られた。

トラフグでは、寄生虫性疾病である粘液胞子虫性やせ病、ヘテロボツリウム症、シュードカリグス症、トリコジナ症、ロンギコラム症、心臓クドア症が見られた。

クエでは、9～10月にウイルス性神経壊死症が6件、4月に寄生虫症が1件発生した。

クロマグロでは、血管内吸虫症や骨折を伴うものが多く、血管内吸虫症単独または合併症として確認されたものが合計16件、骨折を含むものが20件見られた。その他、魚体への影響が不明であるが脳粘液胞子虫症、心臓クドア症、微胞子虫症が確認された。

イサキでは、ウイルス性神経壊死症が1件、原因不明のへい死が1件発生した。

その他の魚種では、ヒラメに滑走細菌症、マアジにへい死を伴う原因不明の疾病、カサゴにミクロコチレ症、オニオコゼにへい死を伴う原因不明の疾病、カワハギにレンサ球菌症、ウナギにガス病、トビウオに寄生虫性疾病が確認された。

(3) 健康診断（資料2）

診断件数は11魚種35件であった。このうち、水産用ワクチン接種に関係した健康診断は3魚種3件であった。魚種別に見ると、アワビ類が8件で最も多く、次いでマダイとクロマグロが5件となった。

(4) 魚種別健康診断状況

ワクチン接種に関係した健康診断として、ブリ、カンパチ、シマアジの検査を行ったところ、ブリでベネデニアの寄生が確認された。他の2種では異常は見られなかった。

マダイでは、エピテリオシスチス、ラメロディスカス、ビバギナの寄生が確認された。

クロマグロでは、心臓クドア、脳粘液胞子虫の寄生が確認された。

アワビ類では、採卵前・放流前のキセノハリオチス症検査を実施し、いずれも陰性であった。